

アキル＝アヒカル物語群（中近東、スラヴ地域）と 棄老伝説難題型（東アジア、インド）の一致をめぐる考察 ——物語の構造分析から歴史へ

三 浦 清 美

A comparative study on the thematic coincidence between Achir-Ahikar stories
and stories of abandoned older people from the East

Kiyoharu MIURA

Abstract

The author provides a series of considerations on the structural coincidence between Achir-Ahikar stories from the Middle East and Slavic countries and stories of abandoned older people from India and Eastern Asia. Analysis of the structure of tales from medieval Russian, Aramaic, Greek, Indian, Chinese, and Japanese (old medieval and folklore) versions revealed the following conclusions:

1. The origin of the stories of abandoned older people is those of an Assyrian councilor Achir-Ahikar.
2. The common plot of the two types of stories is as follows: Because of the malice of Actor(B), Actor(C) sheltered Actor(A). Actor(D) made unconscionable demands on Actor(B) by setting riddles that are difficult to solve. Actor(B) failed to solve them. In place of Actor(B), sheltered Actor(A) solved them, and Actor(B) was relinquished.
3. An Achir-Ahikar type of stories is supposed to have appeared in its initial form as a hidden memory of the tragic end of the Assyrian empire.
4. Stories on Achir-Ahikar, considered to date back to the period of the fall of the ancient Assyrian empire (7 C. BC), were widespread in the medieval era of the Middle East and Eastern Europe and arrived in India some time in the Hellenistic cultural interchange (4 C. BC- 1. C. BC). This type of stories, focused on the life lessons passed down from the older generation to a younger generation, maintained the initial structure. However, they were transfigured into another narrative, focused on the pleasure of solving riddles, just as Gandara statues of ancient Greek Gods were transformed into statues of Buddha.
5. From India, this transfigured type of story spread to the East with Buddhist thoughts on the silk roads by land as well as sea and at last reached Japan, adding new riddles and solutions and abandoning older ones.

1. アキル＝アヒカル物語群

1.1. ロシアにおける『賢者アキルについての物語 Повесть о Акире премудром』

『中世ロシア文学文庫 Библиотека литературы Древней Руси』という中世ロシア文学の全20巻の全集があり、その第3巻「アポクリファ（聖書外典）」に、『賢者アキルの物語』という作品が収録されている⁽¹⁾。この作品は、紀元前7-5世紀のアッシリアの物語に遡る翻訳文学で、さまざまな民族に広範に広まった。アラム語、

(1) Библиотека литературы Древней Руси (Дальше БЛДР). Т. 3. СПб., 1999. С. 28-57, 362-364; 三浦清美「中世ロシア文学図書館 (IV) アポクリファ②」『電気通信大学紀要』25巻1号、2013年、22-33頁。後者は、前者の中世ロシア語テキストからの日本語への全訳である。

アラビア語、アルメニア語、グルジア語、シリア語、エチオピア語、ギリシア語、古代トルコ語、ルーマニア語、スラヴ諸語のヴァリエントが知られている。ルーシ（ロシアの古名）でこの作品が翻訳されたのは11世紀から12世紀にかけてであると考えられているが、シリア語から翻訳されたという説とアルメニア語から翻訳されたという説がある。ここで紹介する物語の要約は、『中世ロシア文学文庫』の中世ロシア語テキストに基づくものだが、この中世ロシア語テキストはロシア古代歴史協会（ОИДР）写本集成189番（ロシア国立図書館所蔵、15世紀）によるものである。

【賢者アキルの物語（要約）】

シナグリフがアドルとナリヴァの王であったころ⁽²⁾、私、アキルはその顧問官を務めていた。神から私に、「お前からは子どもが生まれまいだろう」というお告げがあった。私は嘆いたが、主の言葉を受けいれ、自らの姉の子、アナダン⁽¹⁾を息子として引き取った。私はアナダンを養育し、後継者としてシナグリフ王に引き合わせた。シナグリフ王はアナダンのことが気に入った。

私、アキルは、これらすべてを自らの甥アナダンに教えた。

（ここでアキルがアナダンに与えた130件の教訓が続く。）

私は懸命に彼を教え導いたが、彼が願ったのは私の死だった。アナダンは私を陥れるために、ペルシアの王アロンとエジプトのファラオに、私の筆跡を似せて軍勢の支度をするように指示する手紙を書き、私の指輪印を押した。また、アナダンは私宛のシナグリフ王の手紙をも偽造した。その手紙のなかで、シナグリフ王は私に軍勢を調べて野で自分を待つように命じていた。

8月に私はエジプトの野で軍勢を調べた。そこにシナグリフ王がアナダンとともに来た。シナグリフ王は私が軍勢とともにいるのを見ると、大いに怖れた。王が帰ったあと、アナダンは私のもとに来て、私に接吻してこう言った。「健勝にてあれ、父アキルよ。シナグリフ王はファラオの使節のまゝで面目をほどこしたとお喜びです。シナグリフ王は父上をおそばにお呼びです。」私はアナダンとともにシナグリフ王のもとに行った。シナグリフ王は私を見て色を変えて言った。「私の宰相、私の賢者、アキルよ。余はそなたを栄光と名誉のうちに引き上げたのに、そなたは私に戦いを挑んだ。」アナダンは私に言った。「年老いた無分別者よ、どうしておまゝは王のまゝで申し開きをしないのか。」

シナグリフ王は、私の両手を縛り、私の足に枷をはめ、私の頭を胴体から切り離して、胴体から10ロコチの距離を離れたあと、遺骸を捨てよと命じた。シナグリフ王は、私の身柄を以前から私と親しかった男ナギブナイルに引きわたした。処刑の場へ連れて行かれるまゝに、私は家で別れの宴を催すことを許された。その宴の席で私は、私を処刑するように命ぜられたナギブナイルに言った。「天を見つめ、神を畏れよ。私たちが多くの日々友情をもって生きてきたことを思い出してくれ。先王、シナグリフの父がおまゝを斬首するように私に預けたとき、おまゝは罪を問われていたが、私はおまゝを守り、罪がないことを立証し、王がおまゝの無実を信じるまでおまゝの命を助けてやった。いま私はおまゝに懇願する。私を殺さないでくれ。私の家の監獄には、アラパルという名の男がいる。この男は私に顔が似ていて死刑の宣告を受けている。この者の首を斬り、シナグリフ王がおまゝに命じたように、頭を100ロコチ引き離すのだ。」

私が恩をかけたこの男は、私の望むとおりにした。賢者アキルが刑死したという噂は瞬く間に、アドルとナリヴァの全土に広まった。私の友人と私の妻は土のなかに私を匿った。エジプトの王、ファラオはアキルが殺されたという話を聞き、シナグリフ王に使者を送った。「エジプトの王、ファラオからアドルとナリヴァの王へ、喜びあれ。余は、天と地のあいだに家を造りたい。余が気に入るように、それを建てすべてを設えるように、余のもとに賢い建築師を送るがよい。余はほかの難題にも答えるように要求する。私の問いに答えることができないなら、余にそなたたちの国の3年分の貢税を送るがよい。」

シナグリフ王はこれを聞き、悲しみに暮れ、自らの黄金の玉座から離れると、ボロにくるまりながら、悲しみはじめた。「おお、若造の言いなりになって、どうして私はおまゝを殺したのか。アキルよ、賢さ

(2) ここで言及されているのは、アッシリアとネネヴェの王、センナケリブ（紀元前704-681）のことであると思われる。

きわまりない我が国の知者よ。余は瞬く間にそなたを殺してしまった。」私の友人はシナグリフ王のこの言葉を聞いて、シナグリフ王に跪拝するところ言った。「いま私を殺すようにお命じください。なぜなら、陛下は私にアキルを殺すようにお命じになりましたが、私は彼を匿いました。アキルは生きています。」

私、アキルはシナグリフ王のまえに伺候した。「ファラオが陛下に書いた手紙については、悲しむことはありません。私が行ってファラオに答えましょう。」私は自らの家に遣いを送った。「私のために2羽の雌鷹を手に入れ、飼っておくように。わが鷹匠たちに、その鷹が高く舞い上がるよう教えるように言いなさい。籠を造りなさい。私の家僕のなかから賢い少年を選び、鷹によって舞いあがるこの檻のなかに入れなさい。鷹には舞いあがるように教え、少年には、『石灰と石を運びなさい。建築師たちは準備ができています』と叫ぶよう覚えさせなさい。紐で、檻と鷹の足を結びつけなさい。」

ファラオは翌日私に自分のまえに立つよう命じた。「さあ余に言うがよい。余は誰に似ていて、余の貴顕は誰に似ているか。」私はファラオに答えた。「そなたは太陽に似ており、そなたの貴顕は太陽の光に似ております。」ファラオはしばしの沈黙のあと、私にこう言った。「真にそなたは、そなたを遣わした王の賢者だ。なぜなら、そなたは余の謎を解いたからだ。」ファラオは私に言った。「余がそなたの王に書いたことだが、余のために空と地のあいだに王宮を建ててくれ。」私は、仕込んでおいた雌鷹を届けさせた。私は二羽の鷹を放った。鷹とともに少年も舞いあがった。鷹が舞いあがると、少年は叫んだ。「建築師たちの準備はできている。石と石灰をもって来るがよい。」そのとき私はファラオに言った。「王よ、石と石灰をもって来るようにお命じください。建築師たちが手間取らないように。」ファラオは答えて言った。「誰があんな高みまでもちあげることができよう。」私はファラオに答えた。「私は建築師たちを空へ放ちました。そなたが石と石灰を運ぶことができないなら、それは私たちの負うべき責ではありません。」ファラオは私に何も答えることができなかった。ファラオは私に言った。「宿に下がり、朝早くに参内するがよい。」

私が朝早くに参内し、ファラオのまえに伺候すると、ファラオは私に言った。「アキルよ。このような謎をかけさせてくれ。そなたの君主の馬がアドルとナリヴァの国でいなくなると、我が国の雌馬はわが国で仔馬を生む。」私は、エジプト人が神であると考えていたケナガイタチを捕まえてきて打ちすえた。ファラオはこれを聞き、なぜ我らの神を辱めるのかと言った。私は、「このケナガイタチがナリヴァとアドルの地を駆けて、シナグリフ王から賜った正確な時を鳴く私の雄鶏の頭を食いちぎり、ここに帰ってきたためです」と答えた。ファラオは信じなかったが、私は言った。「私はこのように聞いております。すなわち、アドルの国で馬がいなくなると、この地では雌馬が仔馬を生む、と。ですが、そなたのおっしゃるとおり、エジプトからアドルまで1080露里もあります。」ファラオは、私からこの話を聞くと、肝をつぶした。

ファラオは私にこのように言った。「余の謎を解いてみよ。一本の檜の丸太があった。その丸太のうえに、30の車輪がついた12本の松があった。それぞれの車輪には、2匹ずつねずみがいて、一方は黒く、一方は白い。」私は王にこう言った。「あなたがお尋ねになったことは、アドルとナリヴァの国では馬丁でも知っています。」私は言った。「王は丸太とおっしゃいましたが、それは一年です。丸太にある12本の松とは、一年のなかの12ヶ月です。30の車輪とおっしゃりましたが、それは一か月のなかの30の日です。1匹が白、1匹が黒という2匹のネズミは、昼と夜です。」

ファラオは私にこう言った。「アキルよ。長さが5ロコチ、太さが指くらいの砂の縄を二本縛え。」私、アキルは思案に暮れ、ファラオの宮殿に行き、日の当たる側に壁に指一本入るほどの穴を開けた。太陽が昇ると、その光が穴に射しこんできた。私アキルは柔らかい砂を一握り掴んでその穴に押しこんだ。砂は太陽にあたって縄のようになった。ファラオは私に3年分のエジプトの貢税をくれ、私を丁重に遇し、自らの王シナグリフのもとに返した。

私はシナグリフ王のもとに到着した。シナグリフ王は外に出て私を出迎え、大いなる祝祭を催した。シナグリフ王はアナダンを私のもとに預けた。「そなたの甥アナダンはそなたの手のうちにある。この者については、そなたがしたいと欲することをなんでもやってよい。」私はアナダンに鉄の鎖をつけ、その腕に枷をはめ、首に鉄の輪をはめ、その背中に千回、その腹に千回、鞭打ちを加えた。私はこの者を玄関に

横たえ、必要最小限のパンと水を与え、家が出る時、家に入るときに私がアナダンに言うことを、すべて書き留めさせた。

(ここでアナダンの裏切りや悪の定義について述べた 26 の格言風の言い回しが続く。)

アキルが最後に「私を復活させた神が、我らのあいだに裁きを下さすであろう」と言うと、アナダンは浮き袋のように膨れ上がったかと思うと、真っ二つに割れてしまった。

以上が『賢者アキルの物語』の粗筋であるが、その粗筋を整理すると、以下のようになる。

- ①アッシリアの宰相アキルは、権力、富、妻があるにもかかわらず、子どもがいないことを嘆く。
- ②アキルは、自らの姉の息子、アナダンを養子として迎えることを決心し、アナダンに訓育を与える。
- ③アナダンは訓育を受け、アキルはアッシリア王シナグリフ（センナケリブ）に彼を自分の後継者として紹介する。
- ④アナダンにたいするアキルの教訓。
- ⑤アナダンはアッシリア王の顧問官になるとすぐに、アキルがアッシリア王に陰謀を企てていると、アッシリア王に讒言する。
- ⑥シナグリフ王はアナダンの言葉を信じ、アキルを処刑するように命じる。
- ⑦かつてアキルがシナグリフ王の怒りからその生命を救った友人ナギブナイルが、アキルを匿い、彼を養う。
- ⑧アキルのかわりには、その奴隷が処刑される。
- ⑨アキルが刑死したといううわさが広まると、エジプトのファラオがアッシリアを征服しようとして、天と地のあいだに宮殿を建てろという難題を課す。アナダンはこの難問を解くことができない。シナグリフ王はアキルがいないことを嘆く。
- ⑩彼を匿ったその友人が、シナグリフ王にアキルは生きているということを告白する。シナグリフ王は喜ぶ。
- ⑪シナグリフ王はアキルをエジプトに派遣する。アキルは、ファラオから課された 5 つの謎を解く。謎は以下の通り。
 - (1) エジプト王とその貴顕たちは何に似ているか
 - (2) いかにして天と地のあいだに家を建てるか
 - (3) 馬にかんする難題
 - (4) 丸太にかんする難題
 - (5) いかに砂から縄を緋うか
- ⑫帰還したアキルはアナダンに枷をはめて玄関に置き、家の出入りのさいにアナダンを糾弾する。
- ⑬アナダンの愚行に関する裁きの評言（悪の定義）。
- ⑭アナダンは膨れ上がり、死んでしまう。

1.2. 『トビト記』

『賢者アキルの物語』は、『中世ロシア文学文庫』シリーズでは、「アポクリファ（聖書外典）」の一つに分類されている。それは、アキル＝アヒカルというこの作品の主人公の同じ物語が、旧約聖書『トビト記』に挿話的に挿入されているからである。『トビト記』の物語を要約すると、以下のようになる。

【トビト記（要約）】

ナフタリ族アシエルの家系に属するトビトは、シャルマナサルがアッシリア人の王であったとき、ティスベの地で捕囚の身となり、ニネヴェに連れて来られた。そこでシャルマナサル王に厚遇されたが、異教の食事をとらず、同族の者たちに慈善の業を行った。シャルマナサルが死に、その子センナケリブが継いだが、センナケリブは怒りに任せて多くのイスラエル人を殺した。トビトは、殺されたイスラエル人の遺骸を丁重に葬ったが、このことを密告されてお尋ね者となり、身を隠した。やがてセンナケリブ王は殺さ

れ、その子エサルハドンが王位についた。トビトの甥アヒカルは、エサルハドンに重用された。アヒカルがトビトのことを王に釈明したので、トビトはニネヴェに帰ることができた。

ニネヴェに戻ったトビトはあるとき、殺された同族のある者を葬るとき、目に雀の糞が入り、失明してしまう。さらにこのとき、トビトは妻のハンナとも口論して仲たがいし、深い悲しみに沈んで神に救済を祈った。一方、遠く離れたメディアのエクパタナに住むラゲルの娘サラは、7人の男に嫁いだが、初夜を過ごすまえに、悪魔アスモダイがこれらの男たちを殺したため、女奴隷に恥ずかしめの言葉を受け、悲嘆に暮れて自死を考えていた。この悲しみのなかで、サラは神に救済を祈る。神は二人の願いを聞き届けられた。

失明し、死を覚悟したトビトは、息子の行く末を思い、メディア地方のラゲスのガバエルに預けた金を回収することを思い立つ。そのために息子トビアを送る。旅への出立を目前にしたトビアに、トビトは教訓を与える。この教訓は、『賢者アキルの物語』の④にあたる。天使ラファエルが道先案内人となってトビアに同行した。

旅の途中で、トビアは大きな魚を捕まえる。ラファエルは、魚の胆のう、心臓、肝臓を薬として保存するように命じる。心臓と肝臓は、悪霊退散の効能があり、胆のうは目が見えるようになる効能があった。トビアはメディアナ地方に入り、ラファエルの勧めでラゲルのもとに泊まり、そこでサラと知り合う。トビアは、サラが結婚しようとした男が7人とも初夜のまえに死んでしまったことを聞きつけ、怖気づくが、ラファエルの強い勧めで婚礼を挙げる。初夜の床で、トビアはラファエルの助言に従い、魚の心臓と肝臓で香を焚き、悪魔を退散させてサラと結ばれた。トビアはさらにラゲスに赴き、ガバエルからトビトが貸した金を回収する。ガバエルはトビアが結婚したことを知り、その祝宴に連なる。トビアは、嫁サラと回収した金をもってニネヴェに帰る。トビトと妻のハンナは大喜びする。

トビトは慈善の業を続けながら、112歳まで生きて亡くなる。死に際してトビトは、家族を連れてニネヴェを去り、メディアに向かうように遺言した。神が預言したとおり、アッシリアとニネヴェは滅びるからである。この遺言のなかで、慈善の業の必要を説きながら、アヒカルについて次のように言及される。

私の見るところ、この町では多くの不正が行われ、もろもろの偽りがはびこっているのに、人々は何とも思っていない。トビア、育ての親アヒカルにナダブが何をしたかよく考えてみなさい。アヒカルは生きながら地下の墓に閉じ込められたのではなかったか。しかし神はナダブが御まえで行った卑劣な行為に罰を与えられた。すなわち、アヒカルはふたたび日の目を見たが、ナダブは永遠の暗闇に落ちてしまった。アヒカルを殺そうとしたからである。アヒカルは慈善の業に励んでいたもので、ナダブが掛けた死の罠を逃れることができ、逆にナダブ自身は死の罠に落ちこみ、命を落としたのだ⁽³⁾。

トビアの嫁取り譚のなかに、アキル＝アヒカル物語が組み込まれている。『トビト記』では、アキル＝アヒカルをめぐる筋立てには①～③はそもそも存在せず、④はトビトと息子トビアの別の物語のなかに転移し、⑤、⑥、⑦が「ナダルがアヒカルを生きながら地下の墓に閉じこめた」という単純な筋立てに置き換わり、⑧、⑨、⑩、⑪は存在せず、⑫、⑬、⑭が「神はナダブが御まえで行った卑劣な行為に罰を与えられた」という報告的な表現となる。筋立ては著しく単純化されており、アヒカルという名前から物語の全体像が透けて見えてくる構造になっている。口碑伝説が先行して流布していたことが窺われる。

1.3. アラム語版『賢者アヒカルの言葉』

19世紀末から20世紀初めまでアラム語で書かれた多くのパピルスが発見されたが、エジプトのナイル川上流のアスワンに近いエレバンティネ島で発見されたパピルスは、ことに重要な意義をもっていた。中世ロシア語版『賢者アキルの物語』のもっとも古いテキストである『賢者アヒカルの言葉』が収められていたからであ

(3) 『聖書新共同訳』による。『トビト記』は、『聖書新共同訳』では、「旧約聖書続編」に収められている。

る。このアラム語のテキストの翻訳、注釈をおこなった杉勇は、このテキストは散逸したアッカド語（バビロニア語）の原文に遡ると考えている⁽⁴⁾。その一方で杉は、ペルシア学者、伊藤義教のペルシア語起源説も紹介している⁽⁵⁾。この作品は、やがて『千一夜物語』の補遺に収録されることになる⁽⁶⁾。

『賢者アヒカルの言葉』は、『賢者アキルの物語』と同様に、アキル＝アヒカルの1人称語りで語られている。さらに『賢者アヒカルの物語』では、①、②の部分が『賢者アキルの物語』とまったく同じである。③の部分は、アナダン＝ナディンが仕えるのは、シナグリフ＝センナケリブではなく、その息子のエサルハドンである。④の教訓は、『賢者アヒカルの物語』では、末尾に置かれている。⑤、⑥、⑦は、『賢者アヒカルの言葉』と『賢者アキルの物語』とでは一致する。⑦のアヒカルの命を救う友人の名前は、ナブースムイスクン（『賢者アキルの物語』ではナブギナイル）である。⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑭は写本の段階ですでに失われている。しかしながら、杉によれば、エサルハドンにアヒカルを殺したと報告し、ナブースムイスクンがアヒカルを匿ったこと、エサルハドンがアヒカルの助言を得られなくなったことを痛切に悔やみ、アヒカルが実は生きていたことを知って非常に喜んだこと、アヒカルは復職し、ナブースムイスクンは報償を受けたこと、以上は明らかである。『賢者アキルの物語』と同様に、『賢者アヒカルの言葉』では最後の部分にはあるが、61の教訓的言辭が連ねられている。これは、『賢者アキルの物語』の④、⑬にあたっている。

1.4. 『イソップ伝』

賢者アヒカルは、イソップ寓話の作者とされるイソップに仮託されて、中世に広く流布した。『イソップ伝』に次のような物語がある。『イソップ伝』は紀元前100年から紀元200年のあいだに著された⁽⁷⁾。

【イソップ伝（要約）】

バビロニアのリュクルゴス王の宰相となったイソップは、貴族の子弟を養子にして、後継者に育て上げようとする。この養子は、王の側室と色恋にふけり、譴責されて逆恨みする。養子は、イソップを反逆者として王に讒言する。王は、ヘルミッポス將軍に、イソップを処刑するように命じる。イソップの味方であった將軍は、その命を助け、王には偽りの報告をする。イソップの死去の報を受けたエジプト王のネクタナポンは、バビロニア王に対し、10年の貢納をかけて、難題を吹っかける。それは、地にもつかず、天にも触れぬ高い塔を造る者たちを寄せ、というものであった。王は、イソップを殺してしまったことを嘆く。このとき、イソップの生存が告げられ、やつれた男が連れ出されてくる。養子は、刑死を免れたものの、訓戒の言葉にムチ打たれ、食を断って死ぬ。イソップはエジプトにわたり、鷲の背にそれぞれ子供を乗せ、敷地の四隅で鷲を舞い上がらせる。子どもたちは空中から「泥と煉瓦と材木と、それに道具を渡してください」と叫んだ。謎解きは成功した。

筋立ての①、②、⑧は存在しないが、③、⑤、⑥、⑦、⑨、⑩、⑪、⑫は『賢者アキルの物語』のものがそのまま保たれている。空中に楼閣を作るといふ難題のモチーフが、アヒカル系統の名残をよく留めているし、本来ギリシア人であるはずのイソップやリュクルゴス王が、バビロニアの人間として描かれている⁽⁸⁾。しかしながら、『賢者アキルの物語』、『賢者アヒカルの言葉』と異なり、教訓の列挙はない⁽⁹⁾、1人称語りでもない。⑫のアナダンへの復讐が、「イソップの執り成して養子は刑死を免れるが、食を断って死ぬ」という和らげら

(4) 「賢者アヒカルの言葉」(杉勇訳)『筑摩世界文学大系1 オリエント集』1978年、377-386頁。

(5) 「賢者アヒカルの言葉」377頁。

(6) 井本英一「棄老伝説の起源」『国際文化論集』(桃山学院大学文学部)14号、1996年、78頁；Burton F. R. *Supplemental nights to the book of the thousand and one nights with notes anthropological and explanatory by Richard F. Burton*. Vol.6. pp.1-30；遠田勝「『イソップ伝』の伝承と変容—『アヒカル物語』から『伊曾保物語』まで—」『比較文学研究』44号、1984年、31-59頁。

(7) 中務哲郎『イソップ寓話の世界』筑摩書房、1996年、59-61頁。

(8) 中務哲郎『イソップ寓話の世界』74-75頁；井本英一「棄老伝説の起源」80-91頁；小堀桂一郎『イソップ寓話』138-142頁。

(9) 島田清太郎『イソップ伝の研究』中央公論事業出版、1973年、89-97頁。

れたかたちで替わっている。

『イソップ伝』は、筋立てに関しては、アキル＝アヒカル物語をほとんどそのまま継承している。しかしながら、教訓性が希薄であること、1人称語りでないことは、アキル＝アヒカル物語と次章で扱う棄老伝説難題型との接ぎ穂になることを示している。

2. 東洋の棄老伝説難題型—『枕草子』、『今昔物語』、『打聞集』、『雑宝蔵経』、日本の昔話

2.1. 『枕草子』の蟻通明神縁起譚

大阪府和泉佐野市にある蟻通明神の縁起譚について、清少納言は『枕草子』227「社は」の章で書いている。清少納言は、康保3年（966年）ころに生まれ、万寿2年（1025）ころに没した。『枕草子』の蟻通明神の縁起譚は、アキル＝アヒカル物語と非常に似ている。清少納言はこの物語を、「蟻通しと名をつけたのは、ほんとうにあった話であろうか」と問いかけながらはじめる⁽¹⁰⁾。

【枕草子「社は」(要約)】

昔ある帝が若い人ばかりを大切に40になった者を殺してしまったので、老人はみな逃亡し、都のなかには老人がいなくなった。ある中將は高齢の親をもっていたが、親孝行な人だったので親を僻遠の地にやることを忍びなく思い、家のなかに土を掘って部屋を作り、ひそかに親を匿って暮らしていた。

あるとき、中国の帝が日本の帝をだまして、この国を討ちとろうと思い、言いがかりを吹っかけてきた。きれいに削った丸い二尺⁽¹¹⁾ほどの木の棒をよこし、この元と末はどちらかと問うてきたのである。答えられなければ、敵は攻め込んでくる。この中將は、困り果てた日本の帝を気の毒に思い、親のところに行って事情を話すと、「速い川に棒を横に投げいれ、先になって流れるほうが末だとして送り返しなさい」と教えられたので、帝にそう上奏した。謎解きは成功だった。

次に中国の帝は、二尺ばかりの同じ長さの蛇を二匹よこし、どちらが雄でどちらが雌かと問うてきた。中將はこれも親にたずねると、親はこう答えた。「二匹並べて尾のほうに細い枝をさしよせてみるがよい。尾を動かしたほうが雄だ。」そのように印をつけて蛇を返すと、はたしてその通りであった。だいたったから、七曲りにもくねくねまがった玉で、中に穴が通っていて左右に口があいたものに、糸を通して返すように言ってよこしてきた。上達部、殿上人はみんな困り果てたが、中將は親のところに行って聞くと、親は、大きな蟻を二匹捕まえ、その腰に糸をつけ、その糸の先にもうすこし太い緒をつけて、穴の口に蜜をぬればよいと教えた。蟻を一方の口からいれと、蜜の匂いにさそわれて、もう一方の口からでてきたので、糸が通った。それを送りかえたところ、日本の国はなかなか賢いぞということになり、その後はそんな言いがかりを言ってこなくなった。

帝はこの中將に褒美をやることにした。中將は褒美を謝絶し、老いた両親がいなくなったのを尋ねて、都に住まわせることを許していただきたいと言った。帝はこれを許した。中將は上達部から大臣にまで出世した。神になったその人を祭ったのがこの神社である。

と、ある人が話してくれた。

以後、インド、中国、日本の物語を見ていくが、この型の物語を「棄老伝説難題型」と名づけることにする。中近東からスラヴ世界に広まったアキル＝アヒカル物語と、東洋の棄老伝説難題型では、⑦、⑨、⑩、⑪の筋立てが共通である。ことに⑨の難題の提示と、⑪の難題の解決の部分が、二つのタイプの物語の筋立てのカギとなっている。アキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型とは、筋立ての核心部分に共通のものが多く、これをたんなる偶然と片付けることはできない。アキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型との共通点を整理する

(10) 新編日本古典文学全集『枕草子』小学館、1997年、227「社は」；上坂信男ほか『枕草子（下）』講談社学術文庫、2003年、228「社は」；大庭みな子『現代語訳 枕草子』岩波現代文庫、1994年、「蟻通し明神」。

(11) 60センチメートル。

と、以下ようになる。

アキル＝アヒカルは、棄老伝説難題型の中將の親である。これを行為者 A としよう。日本の帝はアナダン＝ナディンに相当する。これを行為者 B とする。王からアキル＝アヒカルを匿った友人は、中將にあたる。これを行為者 C とする。アキル＝アヒカル物語で難題を課すエジプト王は、棄老伝説難題型では隣国の王（皇帝）に相当する。これを行為者 D としよう。

双方の物語で共通なのは、⑦、⑨、⑩、⑪に該当する以下の【筋立て】である。

【筋立て】：行為者 B の悪意のために、行為者 C は行為者 A を匿うことになる。行為者 D は行為者 B に難題を課すが、行為者 B はそれを解くことができない。匿われた行為者 A は難題を解く。行為者 B は報復を受ける。

本論においては、以下【筋立て】という言葉は、以上の内容を指す。アキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型は、まったく同じ【筋立て】＝構造でできていることがわかる。

アキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型の相違点を考えよう。アキル＝アヒカル物語の①～⑥の筋立てが棄老伝説難題型にはない。この部分の情報は筋立てではなく、「ある君主が若い人ばかりを好み、老人を排除した」という事情説明のかたちで与えられる。また棄老伝説難題型では、⑦の友人（ナギブナイル＝ナブスミスクン）が親孝行の中將に替わっており、⑧と⑫、⑬、⑭はそもそも存在しない。【筋立て】は、⑦、⑨、⑩、⑪で成立している。

アキル＝アヒカル物語では、④アナダンへの教訓における教訓的言辞、⑬アナダンへの評言における悪人の定義が交換可能で、版によってさまざまな教訓や悪人とは何かを定義する文言が付加ないしは削減され、物語に多様性を与えている。アキル＝アヒカルからアナダン＝ナディンへの教訓は、アキル＝アヒカル物語の特徴となってきた。『賢者アキルの物語』では、筆者のカウントで、④は 130、⑬は 26 を数える。紀元前 5 世紀にさかのぼるアラム語の『賢者アヒカルの言葉』においても、これらの教訓は存在する。それは④、⑬あわせて、杉勇の訳で 61 を数える⁽¹²⁾。

物語のこの教訓への傾斜を、かりに「教訓性」と名づけることにすると、私たちは次のように言うことができる。アキル＝アヒカル物語では、④、⑬において看取されるように、教訓性は筋立てから独立して前景化する。それに対して、棄老伝説難題型では、教訓性は存在しているものの、後景に退く。そこでは、「排斥された老人が難題を解決する」という筋立てが、「老人は大切にしなければならない」という教訓性を吸収している。また、アキル＝アヒカル物語では教訓性が際立つのに対して、棄老伝説難題型では、隣国の王が当該国の王に課してくる難題の部分が突出する。この難題部分は交換可能で、作品によってさまざまに変わっている。

清少納言の物語では、難題は次の 3 つである。

- (1) 丸太の本末の識別
- (2) 2 匹の蛇の雌雄の識別
- (3) 曲がった細い穴に糸を通すにはどうしたらよいか

2.2. 『今昔物語集』と『打聞集』

日本の記述文学では、この同じ【筋立て】が何回か現れる。10 世紀後半に清少納言がこの物語を書いたあと、平安時代後期の 12 世紀後半に、仏教説話集である『今昔物語』に同じ【筋立て】が再び現れた。『今昔物語集』は、本朝（日本）、震旦（中国）、天竺（インド）の 3 つの部分に分かれているが、棄老伝説難題型物語は、天竺部に収められ、「七十に余る人を他国に流し遣りし国のこと」という表題が与えられている。その舞台はインドの国々である⁽¹³⁾。

「七十に余る人を他国に流し遣りし国のこと」は、『枕草子』のものよりあとに書かれている。しかし、『枕

(12) 「賢者アヒカルの言葉」(杉勇訳)『筑摩世界文学大系 1 オリエンツ集』1978 年、377-386 頁。

草子』が『今昔物語』に対して直接の影響を与えたとはむずかしい。『枕草子』の語句、「蟻通しと名をつけたのは、ほんとうにあった話であろうか」、「と、ある人が話してくれた」などから、清少納言のヴァリエーションは口承の話によったことが窺われるが、これに対して、今昔物語のほうは、インドの経『雑宝蔵経』に遡ることがわかっているからである。この物語は、仏教の東漸にともない、書き言葉によってインドから日本に到来したと考えられる。

「七十に余る人を他国に流し遣りし国のこと」は、【筋立て】自体はまったく同じである。①～⑥の筋立てが棄老の状況説明に変わり、⑦の友人が親孝行の大臣に替わり、⑧と⑬が存在せず、⑦、⑨、⑩、⑪の【筋立て】はアキル＝アヒカル物語とほぼ同じである。⑨の難題の提示と⑪の難題の解決の部分も共通している。『枕草子』の場合と異なるのは、親が母親であること、母を匿っていることは家の者も知らなかったこと、隣国が難題を解けなければ7日のうちに滅ぼすだろうと脅したことなどのディテールが加わっていることである。そのほか、難題の内容が異なっている。『今昔物語集』の場合、難題は以下のとおりである。

- (1) 同じ大きさの2頭の牝馬の親子の識別
- (2) きれいに削り、漆を塗った2本の木の本末の識別
- (3) 象の重さの計量

この物語では、匿われた大臣の老いた母が3つの難題を解く。その褒美として、王は彼に褒美をあたえ、70以上の老人もその国に住むことをゆるし、国の名前を「棄老国」から「養老国」へと変える。

同じ話が、仏教説話集である『打聞集』にも収められている⁽¹⁴⁾。『打聞集』は、平安末期の仏教説話集で、仏僧栄源が1134年（長承3年）に祖本から書写したもので、27話からなっている⁽¹⁵⁾。その第7話に「七十に余る人を他国に流し遣りし国のこと」とほぼ同じ話が収められている。難題の内容も同じである。

2.3. インドの経『雑宝蔵経』—『今昔物語』の原典

『雑宝蔵経』は、おそらくはインドで紀元2世紀に成立したと考えられる。それは、472年に、西域の仏僧、吉迦夜と中国の仏僧、曇曜によって中国語に訳された⁽¹⁶⁾。中国学者の岡田充博は、この難題譚が3世紀に書かれた中国の武将、曹沖伝にすでにあらわれると指摘し、次のように考えている。「この難題譚は、漢代にはじまる仏教の中国伝播の歴史のなかで（あるいは古来からの中印交流のなかで仏教とは別に）、口頭伝承として早くに伝えられていたと考えられる。」⁽¹⁷⁾

『雑宝蔵経』第2巻第14話に、私たちは『枕草子』「社は」と同じ【筋立て】を見出すことができる。①～⑥の筋立てが棄老の状況説明に変わり、⑧と⑬が存在せず、⑦、⑨、⑩、⑪の【筋立て】はアキル＝アヒカル物語とほぼ同じであるが、⑦の友人が天神に替わっている。⑨の難題の提示と⑪の難題の解決の部分も共通しているが、難題の数が以下のように9つにも上っている。

- (1) 2匹の蛇の雌雄の識別
- (2) 眠っている者が覚めた者と呼ばれ、覚めた者が眠っていると呼ばれるとは誰のことか
- (3) 白象の計量

(13) 『新日本古典文学大系 33 巻 今昔物語集 5』岩波書店、1999 年、470-474 頁、507 頁；『枕草子（下）』講談社学術文庫、2003 年、41-56 頁。

(14) 『新日本古典文学大系 33 巻』、507 頁。

(15) 「打聞集」日立デジタル平凡社『世界大百科事典』Ver.10、1998 年；国会図書館デジタルコレクション、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1192812>（2022 年 7 月 8 日閲覧）。

(16) 鎌田茂雄他編『大蔵経全解説大事典』雄山閣出版、1998 年、59 頁；『雑宝蔵経』『仏教辞典 第 2 版』岩波書店、2002 年、641 頁。

(17) 岡田充博「象の重さを量る話—『三国志』曹沖伝、教材としての可能性—」『教育デザイン研究』（横浜国立大学教育人間学部教育学研究科紀要）創刊号、87 頁。

- (4) 一掬の水が大海の水よりも多いとは、どのような道理か
- (5) 痩せこけた飢餓の人よりも飢えの苦しみがひどい者はいるか
- (6) 手足の枷をはめ、首に鎖をかけ、火によって満身焼け爛れた人よりひどい苦しみの者はいるか
- (7) 容姿端麗の美女に勝る女人はいるか
- (8) 梅檀（せんだん）の角材の本末の識別
- (9) 同じ毛色体格の牝馬の母子の識別

そのうち4つ、(1)、(3)、(8)、(9)は私たちにもすでにおなじみのものであるが、残りの5つはいくぶん抽象的な謎かけで、ほとんど禅問答のようである。これらの謎は、仏教的な思想で解く仕掛けになっている。

また、『雑宝蔵経』では、人々に知恵ある老人の尊さを示すために、難題を与えるのが隣国ではなく、天神となっている。『雑宝蔵経』の物語の作者は、難題をあたえる者を人間ではなく、天神とすることで「教訓性」をより強調した。この「教訓性」ゆえに、私たちは、インドのヴァリエーションは、清少納言や今昔物語のそれよりも、アキル＝アヒカル物語に近いという結論に達する。棄老伝説難題型の分布を概観しながら、中国文学研究者の岡田は、この筋立ての分布の最も西はインドであるという結論に達した⁽¹⁸⁾。

ここまでで、アキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型の共通点と相違点を検討してきた。共通点は、⑦、⑨、⑩、⑪の【筋立て】である。ことに⑨の難題の提示と⑪の難題の解決のセットは特徴的で、両者が実は同じ物語であることを示している。相違点は、東洋の棄老伝説難題型では、アキル＝アヒカル物語の①～⑥の筋立てが棄老の状況設定（情報提示）に変わっている点、⑧、⑬が存在していない点である。さらに重要なことは、そのような記述文学の作品においても、物語の口承的性格が強く認められるということである。これらの物語は、はじめは口頭で語られていたが、その後、何らかのきっかけで偶然書き言葉で記述されることになり、さらに東方に伝えられることになったのではないだろうか。

岡田は、敦煌文書のペリオ 2721 に収められた、この筋立ての中国語ヴァージョンを紹介しているが、これは世俗的な性格の非常に強いものである。また、中国内モンゴル自治区のオールドス地方に伝わる民話にも同様の話がある。ここでは難題が二つで、木の本末の識別のほか、ラバのような動物で人を見ると膨れて大きくなる動物の正体は何かという難題が加わる⁽¹⁹⁾。これも口碑伝説である。インドでも、この【筋立て】はさかんに口頭で語られていた。日本のインド文学研究者である田中於菟彌（おとや）は、次のように述べている。「この話に関する古い出典を、私はいまだ見出せないが、この話が現在もインドの民話として語られていることをインド人から聞いた。その人は、ウフタル・ブラディーシュの出身で、子供の頃この話を聞き、絵本でも見たことがあるという。『雑宝蔵経』にあるこの話が、現在まで語り伝えられているということは、古くから北インドに普及していて、それが仏教説話として伝えられたものであろう。」⁽²⁰⁾

『大和物語』156段の棄老譚では、この【筋立て】自体は存在しないが、にもかかわらず、親代わりだった伯母を捨てるのが「甥」であり、井本英一はこのディテールに、口承伝説として伝えられたアキル＝アヒカル物語の残影を見ている⁽²¹⁾。田畑博子は、紀元前3世紀に成立したと思われる『南伝本生譚（ジャータカ物語）』のこのタイプの物語を紹介しているが、これも【筋立て】の明瞭さを欠き、難題譚に傾斜している。その内容は以下の通りである。インドのマホーサダは、ヴィーデーハ王を敵王の城内からトンネルを掘って脱出させなければならなくなる。そのとき出された難題を比類なき最高の賢者マホーサダが解いて助ける。7歳の賢者であるマホーサダは、王の命による19の難題をことごとく解決していく⁽²²⁾。

(18) 岡田「象の重さを量る話」89頁。

(19) A. モスタールト『オールドス口碑集』（磯野富士子訳）平凡社東洋文庫 59、1966年、109-112頁。

(20) 田中於菟彌「インド説話の流伝に関する私見」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』11号、1965年、111頁。

(21) 井本英一「棄老伝説の起源」95-97頁；『大和物語下』講談社学術文庫、2006年、190-196頁。

(22) 田畑博子「棄老伝説（難題型）の源流」『口承文芸研究』37号、2014年、56頁；中村元『ジャータカ全集10』春秋社、1988年、1-148頁。

2.4. 日本の昔話

この物語が口承起源であることは、⑦、⑨、⑩、⑪の【筋立て】をもつ物語が日本各地で採集されていることから裏づけられる。柳田国男（1875-1962）は、この筋立てに言及し、それがはるか昔に外国から輸入され、国中に広まったものと考えた²³。昔話学者たちは、日本のさまざまな場所でこの同じ【筋立て】の物語の収集を進め、その成果は、1970年代に相次いで刊行された日本昔話集に収められた。稲田浩二と小沢俊夫編集の『日本昔話通観』²⁴と関敬吾編集の『日本昔話大成』²⁵がそれである。

この筋立てをもった昔話を昔話学者たちは、「親棄て山難題型」に分類する。この話型は日本では非常に普及しており、ほぼ日本全国で採集されている。関敬吾はこのタイプの昔話を、『アアルネ、トムソンのタイプ・インデックス』の922番「司祭の代理である羊飼いが王の質問に答える」（「王と修道院長」）²⁶、981番「匿われた老人の知恵が王国を救う」²⁷と関連づけている。アアルネ、トムソンはアヒカル物語を922番と関連づけるが²⁸、本稿の筆者は981番と関連づけるほうがふさわしいと考えている。

日本の昔話においても同じ【筋立て】が現れるが、課される難題はきわめて多様である。日本のフォークロア学者の関敬吾は、現われる難題を概括しながらつぎのように述べている。「親棄山の興味の中心となっている難題はきわめて多様であるが、これを検討するとほぼつぎのごとくである。(1)灰縄(68例)、(2)蟻通し(31例)、(3)木の本末の識別(25例)、(4)雄牛、馬などの動物の親子の判断(18例)、(5)牛の重量の計り方(4例)などである。」²⁹

関がアキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型との相似を考えるさいに「縄を綯う」というモチーフに着眼していることはとくに重要である。「灰で縄を綯う」は、日本の昔話でもっとも広範に流布したモチーフだった。関は次のように述べる。「いまひとつ重要な問題は灰縄である。これはおそらく『砂で縄をなう』の変化形であろう。われわれの身近の例は朝鮮の伝承である。これはきわめて古い起源をもつモチーフである。ラテン語の格言(ex arena funem nectere)で『汝は灰で縄を綯う、汝は不可能な仕事をする』意味に使われる。」³⁰

アキル＝アヒカル物語では「砂で縄を綯う」となっていたところが、日本の昔話では「灰で縄を綯う」になっている。砂漠の多いパレスチナでは「砂」となっていたものが、山地の日本では木を燃やしてできる「灰」になる。おそらくラテン語の格言もアキル＝アヒカル物語に由来するものだろう。ここで、両者の物語が「古い世代と若い世代との確執」という共通のテーマをもっていたことを想起しよう。これらのことは、アキル＝アヒカル物語と棄老伝説難題型が実は同じ起源であることを示すものだ。以上の考察の結果、東洋に広くみられる棄老伝説難題型の源流は、アッシリア起源のアキル＝アヒカル物語であったと結論づけることができる。

3. 人類史上初のベストセラーとしてのアッシリアのアヒカル物語—事実と想像力

以上の物語の構造分析から導かれた結論は、じつは日本の研究者たちによってすでに主張されていたことで

²³ 『定本柳田国男集 21』筑摩書房、1970年、294-305頁。

²⁴ 稲田浩二、小沢俊夫『日本昔話通観』28巻、420-421頁。「410A 姨捨て山—難題型」において、AT（アアルネ、トムソン）981に属する物語として〈資料編〉掲載の巻、頁番号が挙げられている。

²⁵ 関敬吾『日本昔話大成』11巻、角川書店、1975年、104頁。523A 親捨山（AT981）、523B 蟻通明神（AT981）。

²⁶ №922：社会上層にいるある人が、ある聖職者が一定時間内に3つの難問を解き、それができなければ殺すと脅す。その聖職者はその問題に答えることができず、変装させたある代理人を送る。その男は、彼の代わりにすべての質問に正確に答える。この欺きがばれると、質問者はこの計略を許し、答えた者に褒賞を与える（その修道院長あるいは修道士の命を助ける）。The Types of International Folktales. A Classification and Bibliography based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson by Hans-Joerg Uther, Helsinki, 2004, pp.552-555；関敬吾『日本昔話大成』11巻、278頁。

²⁷ №981：飢餓（戦争）のとき、若い人々が集まりをもって、すべての老人たち、役に立たなそうに見える人たちを殺してしまうように決議する。ある男が自らの父親を隠す。若い統治者たちのもとで万事がうまくいかなかったとき、賢い老人が現れてよい助言を与え、窮状を救う。ただちにその老人は褒賞を与えられ、老人を殺す習慣は廃される。The Types of International Folktales. pp.612-613；関敬吾『日本昔話大成』11巻、104頁。

²⁸ The Types of International Folktales. p.554.

²⁹ 関敬吾編『日本昔話大成 9』278頁。

³⁰ 同上。

もある。日本昔話研究の泰斗、稲田浩二は「姥捨て山」伝説をアキル＝アヒカル物語と関連づけている⁽³¹⁾。東洋の棄老伝説難題型の起源をアキル＝アヒカル物語に求める論考のなかで、管見の及ぶかぎりもっとも優れていたのは、2014年に書かれた田畑博子の論文⁽³²⁾である。岡田充博が東洋の棄老伝説難題型の起源をインドに求めていることを述べたが、田畑はこのインド起源説と、井本英一⁽³³⁾、岩男久仁子⁽³⁴⁾らが主張する古代オリエン特起源説の双方の説を比較検討した結果、東洋の棄老伝説難題型の起源は、アッシリアを舞台とするアキル＝アヒカル物語であると論証した。彼女の論証は、東から西に、流れを遡り、起源を求めるかたちで行われ、そのさいに取った手法は、難題譚の比較であった。これに対して、本論の論証は、西から東へ、流れを下って伝播の経路を追跡するかたちで、【筋立て】の同定とディテール（難題譚）の比較による物語の構造分析という手法に基づいて行われた。この複合的な方法は、アキル＝アヒカル物語が多くの話素をもち、有機的連関を保存していたためはじめて可能だった。

昔話学者である関敬吾は、昔話のタイポロジーを記述するさい、棄老伝説として523A 親棄山、523B 蟻通明神、523C 親棄畚、523D 親棄山の4つを挙げているが、アキル＝アヒカル物語と関連があるのは523Aと523Bのみである。523Cの筋立ては以下の通りである。子が親を山に捨てるさい、親が道しるべに枝を折り、親を運んできた畚を息子が山に捨てられる時まで大切にしよう助言する。一方、523Dの筋立ては以下の通りである。夫婦で老いた親を山に捨てるさい、小屋を作り、そこに親を入れてから小屋に火を放つ。老人は逃れて呪物を得てよい生活をするが、それを発見して羨んだ子が真似て失敗する。女房は夫を小屋に入れて火をつけ、夫は焼け死ぬ。523Cも523Dも、アキル＝アヒカル物語の【筋立て】とは関係がない。井本も岩男も、東洋の棄老伝説難題型の起源をアキル＝アヒカル物語に求める点で成果を上げているが、昔話学者の棄老伝説の区分(523)に引き込まれて、残念ながら、A・BとC・Dの峻別をしていないように思われる。この点、田畑は523A・Bのみに関心を集中して難題譚の比較を行っており、より踏み込んだ考察を展開している。

ここで本論の結論を述べることにしよう。それは、アキル＝アヒカル物語の伝播のプロセスに関するものである。アッシリア帝国の滅亡期に創作された、教訓性の強いアキル＝アヒカル物語はおそらくヘレニズム時代に、教訓性が消え、1人称語りから3人称語りに替わった『イソップ伝』に変成し、それが、ギリシアの神像がガンダーラに伝わり仏像となったように、ヘレニズム世界をインドに伝わり、ここで教訓性は敬老思想に入れ替わり、そこからは仏教思想東漸の流れに乗り、各地で難題譚を拾い集めたり捨てたりしながら、シルクロード経由で日本にたどり着いたものであろう。まさに紀元前7-5世紀に起源をもつ【筋立て】を伴うこの物語は、人類史上最初の世界的ベストセラーだったのである。

すでに指摘したように、東洋の棄老伝説難題型では、難題は交換可能であり、物語の享受者たちは、難題の多様性と謎解きの思いがけなさに語りの楽しさを見出していた。難題とその解決法の多様性は、無限の可能性を感じさせる。これに対して、中近東、スラヴ世界のアキル＝アヒカル物語は、難題の多様性は確かに存在するものの、関心の中心はむしろ、教訓や悪の定義にあったように思われる。アキル＝アヒカル物語では、教訓性が突出している。東洋の棄老伝説難題型のもつ謎解きの明るさと、アキル＝アヒカル物語の教訓性の暗さのコントラストが、両者がもともと同一の物語であることを隠してきたとも言える。それでは、アキル＝アヒカル物語のこの教訓や悪の定義への異様なこだわりは何に由来するのか。

そもそも、アキル＝アヒカル物語は、不吉な雰囲気包まれている。そこには、救いがたいある「暗さ」が存在する。子供ができない、養子の裏切り、奴隷の処刑、アキル＝アヒカルの復讐、アナダンの死、いずれも取り返しのない不幸というほかない。こうした要素は、東洋の棄老伝説難題型には存在しない。驚くべきなのは、アキル＝アヒカル物語においてアナダンに向けられた一連の教訓、論難から感じられる怒りのパトスである。この怒りのパトスは、一種異様である。私たちは、アキル＝アヒカル物語の根底には、恐ろしい不幸が隠されていることを予感する。棄老伝説難題型はハッピーエンドであるが、アキル＝アヒカル物語はハッピーエ

(31) 稲田浩二、稲田和子『新版日本昔話ハンドブック』三省堂、2010年、37-40頁。

(32) 田畑博子「棄老伝説（難題型）の源流」『口承文芸研究』37号、2014年、54-64頁。

(33) 井本英一「棄老伝説の起源」『国際文化論集』14号、1996年、77-100頁。

(34) 岩男久仁子「イソップ伝の『難題問答』」『国際文化論集』39号、2009年、229-237頁。

インドに見えてその実、そこには抜きがたい怨恨が潜んでいるのである。

最後にもう一度、「ほんとうにあった話であろうか」という清少納言の問いに戻ろう。トヴォロゴフの言うように、「アキルに関するスラヴの物語のプロトタイプが、しばしば指摘されているように、紀元前7世紀のアッシリアに遡るもの」³⁵⁾ならば、私たちはその当時のアッシリアにかんする歴史的な事実のまゝで立ち止まらなくてはならない。アキル＝アヒカル物語は、何らかのかたちでその歴史的事実とかかわりをもつからだ。

紀元前7世紀のアッシリアは、センナケリブ王（BC705-680）、エサルハドン王（BC680-669）、アッシュールバニパル王（BC669-627）のもとで政治的繁栄を謳歌していたが、アッシュールバニパル王の死後、わずか十数年後の紀元前612年に滅亡した。アッシリアは、文字とおり、絶頂から奈落の底に突き落とされた。アッシリアのこの突然の転落の原因は最後まで突きとめられてはいないが、一部の学者たちはそれが内戦のためであったという説を提示している³⁶⁾。アキル＝アヒカル物語にこの内紛の痕跡があると、私たちは考えることはできないだろうか。その痕跡とは、若い世代の指導者が老いた世代の人々に対して敵意を抱き、彼らを見殺したことが、強力な帝国を滅亡に追いこんでしまったという深い悔いと恨みである。

ここに歴史的事実の核心があると筆者は考える。旧約聖書『トビト記』において、この【筋立て】がアッシリア帝国の滅亡とともに語られていたことを想起しよう。実際には、アキル＝アヒカルはアッシリア帝国とともに、甥（姉の息子）によって企てられた陰謀によって死んだのではないか。賢明な宰相と自らの帝国の滅亡に対するアッシリア人の恨みと驚愕は、史実としては死んだアキル＝アヒカルを文学的な想像のなかで生き返らせた。このような歴史の基盤のうえで、アキル＝アヒカル物語の最初の作者たちは、私たちが検討してきたこの物語を考えついたのではないか。【筋立て】は、強力な帝国のあっけない最期の記憶として現れたが、伝播の過程で具体的な事件に関する記憶は忘れ去られた。そして、老人の賢い助言の尊さを語る【筋立て】だけが残され、謎解きの語りの楽しみとともに、東洋のもっとも端の日本まで伝わることになった。したがって、清少納言の「ほんとうにあった話であろうか」という問いには、私たちは次の二通りの答え方ができる。一つは「そうです。実際に起こったことです」であり、もう一つは、「いいえ、そんなことは起こりませんでした」である。

あとがき

本論考は、東京大学教授三谷恵子さんが2015年3月18日に主宰したシンポジウム「『賢者アキルの物語』：中世スラヴ文学への新しいアプローチ」でのロシア語の口頭発表を、日本語の論文としてまとめ直したものです。三谷教授は2022年1月17日に逝去されました。アキル＝アヒカル物語を考える機会を与えてくださったことを感謝し、ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

³⁵⁾ БЛДР Т.3. С. 362.

³⁶⁾ «Mesopotamia, history of» // «Encyclopedia Britannica 2006 Ultimate reference Suite DVD»